

科目名：小児看護学概論	配当年次 1 年	開講時期 1 年後期
単位・時間：1 単位（1 5 時間）	授業の方法：講 義	
担当者： 曲山 さち子	実務経験のある教員による授業 <input type="checkbox"/>	
授業概要 目的・到達目標	<p>わが国の社会環境の変化に伴い子どもを取り巻く環境も大きく変化し、少子化・核家族化を迎えている。現代の子どもを取り巻く社会や家族は、子どもの健康問題に深く関係している。これらを踏まえ、わが国の小児看護の変遷や小児看護の目的・役割、さらに子どもを取り巻く法律の現状を理解し、次代を担う子ども達が子どもの権利を尊重され、健やかに成長・発達していくための支援に役立つ専門的知識を学ぶ。</p>	
授業の計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 小児看護の概要・変遷 2. 小児と家族の諸統計 3. 小児をめぐる法律と政策 4. 小児看護における倫理 5. 子どもにとっての家族 6. 小児各期における成長・発達の特徴 7. 小児各期における健康問題と看護 8. 内容のまとめ（ポイントの強化）・筆記試験 	
成績評価の方法・基準	筆記試験 90%、課題レポート 10%	
テキスト	<p>【教科書】</p> <p>系統看護学講座 小児看護学[1] 小児看護学概論 小児臨床看護総論 医学書院 e-テキスト 国民衛生の動向 厚生統計協会</p>	
履修上の注意事項		

科目名：小児看護学方法論 I	配当年次 2年	開講時期 2年前期
単位・時間：1単位（15時間）	授業の方法：講 義	
担当者： 飯島謙次・小川俊一	実務経験のある教員による授業 <input type="checkbox"/>	
授業概要 目的・到達目標	わが国の子どもの疾病構造は、社会環境の変化と医学・科学の進歩に伴い変化してきている。このことから、難病性の先天性疾患・悪性新生物、成人病予備軍と言われている肥満や慢性疾患、小児心身症の増加をたどっている。小児期に特徴的な健康障害の種類、病態、診断治療についての専門的知識を学び、小児看護の実践に役立てる。	
授業の計画	1～4．先天性疾患 伝染性疾患 循環器疾患 神経系疾患 内分泌・代謝疾患 5～7．呼吸器疾患 消化器疾患 血液・免疫疾患 腎・泌尿器疾患 8．内容のまとめ（ポイントの強化）・筆記試験	
成績評価の方法・基準	筆記試験 100%	
テキスト	【教科書】 系統看護学講座 小児看護学[2] 小児臨床看護各論 医学書院 e-テキスト 【参考文献】	
履修上の注意事項		

科目名：小児看護学方法論Ⅱ	配当年次 2年	開講時期 2年前期
単位・時間：1単位（30時間）	授業の方法：講義	
担当者：株崎雅子 岡崎智美 立花亜紀子 実務経験のある教員による授業 <input type="checkbox"/>		
授業概要 目的・到達目標	<p>小児は、成長・発達が著しく新生児期、乳児期、幼児期、学童期、思春期、青年期という発達段階を過ごしている。これらの時期の小児は、家族の中で生まれ、集団生活の中で社会生活の基盤を形成していくという発達課題の特徴をもっている。これらのことを踏まえ小児看護では、子どもと家族を中心とする看護を基本的理念とし、入院中の子どもだけでなくあらゆる場面ですべての健康レベルの子どもを対象としている。小児期における病気や入院が小児と家族に与える影響を考え、小児期にある対象の健康障害に応じた看護を学び、小児看護の実践に役立てる。</p>	
授業の計画	<p>1. 病気や入院が子どもと家族に与える影響とその看護</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ストレスを緩和させるための看護 ・ 外来における子どもと家族の看護 ・ 入院中の子どもと家族の看護 <p>2～14. さまざまな状況にある小児と家族に対する看護</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 急性期～回復期にある子どもと家族の看護 (感染症・麻疹・風疹・水痘・流行性耳下腺炎・かぜ症候群。低出生体重児の看護) ・ 慢性期にある子どもと家族の看護 (気管支喘息、ネフローゼ症候群・DM) ・ 周手術期における子どもと家族の看護 (先天性心疾患、ヒルシュスプルング病、肥厚性幽門狭窄) ・ 救急救命処置が必要な子どもと家族の看護 ・ 終末期にある子どもと家族に対する看護 (白血病、悪性新生物) <p>15. 内容のまとめ (ポイントの強化)・筆記試験</p>	
成績評価の方法・基準	筆記試験 90% 課題 10%	
テキスト	<p>【教科書】</p> <p>系統看護学講座 小児看護学[1] 小児看護学概論 小児臨床看護総論 医学書院 e-テキスト</p> <p>系統看護学講座 小児看護学[2] 小児臨床看護各論 医学書院 e-テキスト</p> <p>【参考文献】</p> <p>鴨下重彦 監：子どもの病気の地図帳 講談社 2002 小児の発達と看護 メディカ出版 2015 情緒発達と看護の基本 メディカ出版 2013</p>	
履修上の注意事項		

科目名：小児看護学方法論Ⅲ	配当年次：2年	開講時期：2年前期・後期
単位・時間：1単位（30時間）	授業の方法：講義・演習	
担当者：蜂須 直美 大谷 博美 黒河内 誠司 実務経験のある教員による授業 □		
授業概要 目的・到達目標	<p>【講義内容】</p> <p>本講義では、“小児に必要な基本的技術、小児のコミュニケーション技術の特徴であるプレパレーションを学び、小児の権利を擁護し発達を考えて看護技術を提供する”ということについて演習を通して学ぶ。</p> <p>小児看護におけるコミュニケーションは、小児と家族の理解や信頼関係を基盤として、関係性を築く上で必要な要素である。コミュニケーション能力の発達過程にある小児は、発達段階が小さければ小さいほど言語的コミュニケーションで表現することが難しく、非言語的コミュニケーションが重要となる。よって、バイタルサイン測定や診療の介助を通じた観察から、フィジカルアセスメントをして状況の把握をする。</p> <p>事例を用いて、小児の発達段階や症状・疾病の特徴を理解する。小児にどのような看護が必要か、援助の原則を踏まえ根拠を明確にする。事例の状況の中で、どのようにコミュニケーションをとるかを考える。症状・治療、検査が子どもに与える影響を考え治療における意思決定を支援する関わりを意識する。さらに、発達段階から病床環境を考え危機予測ができ回避行動がとれることを目指す。</p> <p>目標：1. 小児看護に必要な基本的技術を学ぶ。 2. 小児に必要な基礎的技術を健康障害、発達段階に応じて安全に実施ができる。</p>	
授業の計画	<p>1. 環境を調整する、安全・安楽を確保する基本的技術の基本</p> <p>①小児看護領域で特に留意すべき子どもの権利と必要な看護行為</p> <p>②バイタルサイン測定・身体計測・固定法の原則</p> <p>③コミュニケーション技術の特徴、インフォームドコンセント、インフォームドアセント、プレパレーション</p> <p>2～3. 健康障害がある小児に必要な看護の実際（情報収集とアセスメントの視点） 子どもの症状の特徴</p> <p>① 不きげん</p> <p>② 啼泣</p> <p>③ 痛み・子どもの痛み、痛みを伴う子どもの看護</p> <p>④ 呼吸困難</p> <p>4～6. 子どもにおける疾病の経過と看護</p> <p>① 慢性期にある子どもと家族の看護 ・医療的ケア児及びその家族に対する支援 医療的ケア児とは 医療的ケアを継続するための支援</p> <p>② 急性期にある子どもと家族の看護 日常生活を整える援助、成長発達を支える援助、</p> <p>7～12. 事例から小児の発達段階、疾病の特徴を考えた援助方法を考える 急性期疾患を持った子どもと家族の看護</p> <p>① コミュニケーション技術 ②バイタルサイン測定 ② 身体計測 ④検査・治療・処置に対する技術（吸入・採血・点滴）</p>	

	<p>在宅療養を受ける子どもと家族の看護</p> <p>⑤ コミュニケーション技術</p> <p>⑥ バイタルサイン測定</p> <p>⑦ 身体計測</p> <p>⑧ 検査・治療・処置に対する技術 (浣腸・採血・経管栄養)</p> <p>13, 14 日常生活を整える援助、成長発達を支える援助 ・摂食機能の獲得と健康状態にあった食事援助</p> <p>実技試験</p> <p>15 筆記試験 (小児の基本的技術・基礎知識)・振り返り</p>
成績評価の方法・基準	筆記・演習・技術 80 点 課題：20 点
テキスト	<p>【教科書】</p> <p>系統看護学講座 小児看護学[1] 小児看護学概論 小児臨床看護総論 医学書院 e-テキスト</p> <p>系統看護学講座 小児看護学[2] 小児臨床看護各論 e-テキスト</p> <p>【参考文献】 山元恵子：写真でわかる小児看護技術 インターメディカ</p>
履修上の注意事項	主にモデル人形を使い、実習室で演習を行う。 身だしなみを守り、自律した授業展開ができることを期待する。